

令和 2 年 6 月 2 日現在

機関番号：33908

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13477

研究課題名(和文)高齢者のエンド・オブ・ライフへの態度構造の探索と実践的ツールの開発

研究課題名(英文) Exploring attitudes toward end-of-life among older adults and developing practical tools

研究代表者

川島 大輔 (Kawashima, Daisuke)

中京大学・心理学部・准教授

研究者番号：50455416

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本人および米国人の高齢者への調査を通じて高齢者のエンド・オブ・ライフへの態度とその関連要因を探索した。具体的には、エンド・オブ・ライフへの態度ならびに、健康度や他の関連要因についての質問項目を含む質問紙調査を行ない、同時にエンド・オブ・ライフへの態度の測定尺度の開発も行った。結果として、エンド・オブ・ライフへの態度構造と関連要因が明らかになった。また米国の地域高齢者のエンド・オブ・ライフへの態度についての調査の実施、ならびにエンド・オブ・ライフの活動を促進する実践的ツールの開発を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

エンド・オブ・ライフについては、医療現場でのケアに関連した研究が多数を占めており、高齢者施設入居者や自立的生活を営む大多数の高齢者のエンド・オブ・ライフについてはこれまで十分検討されていない。とくに高齢者が有するエンド・オブ・ライフへの態度の実態と関連要因についての詳細な心理学的考察は極めて乏しい。またエンディングノートや終活セミナーなど様々なツールのほとんどは学問的知見に裏付けされたものではなかった。こうした状況に鑑みて、高齢者のエンド・オブ・ライフへの態度と関連要因を明らかにし、調査に基づく具体的な実践ツールを開発したことの学術的・社会的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：We have explored attitudes toward end-of-life (EOL) and its related issues among Japanese and American older adults. The survey contains a series of questions regarding attitudes toward end-of-life as well as general health status and other related variables. We also developed a psychological scale assessing attitudes toward end-of-life. Our results revealed the structures of EOL attitudes and related variables. Additionally, we explored the EOL attitudes among American older adults and developed practical tools for promoting EOL activities.

研究分野：生涯発達心理学

キーワード：エンド・オブ・ライフ 死 生涯発達心理学 高齢者 アクションリサーチ 終活 国際比較

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

高齢化率の著しい日本では、高齢者を取り巻く様々な問題が社会的にも学問的にも議論されている。また「自分らしいお葬式」の流行や終活セミナーの盛況にみられるように、人生の終焉(エンド・オブ・ライフ)をめぐる動向に対して、高い社会的関心が寄せられている。

これまでのエンド・オブ・ライフに関しては、事前指示書(Advanced Directives)や ACP (Advanced Care Planning) など治療方針に関わる側面について多くの議論が行われてきたが、医療現場以外でのエンド・オブ・ライフについてどう考えるかという側面は十分検討されてこなかった。他方で、日本社会で注目される「終活」での中心的な関心は、葬儀や墓などをめぐる社会文化的あるいは経済的な側面であり、実践的・学術的議論と社会的関心の間には大きなギャップが存在していた。またこれまでの研究では、もっぱら死が目前に迫った末期患者およびその家族が対象になっており、高齢者施設入居者や自立的生活を営む大多数の高齢者のエンド・オブ・ライフについては十分な検討がなされていない。さらに高齢者自身がどのようなエンド・オブ・ライフへの態度を有するのかを、その関連要因とともに詳細に検討した心理学的考察は極めて乏しい。

またエンディングノートなどの具体的取り組みにおいては超高齢社会の日本は他国に先進しているといえるが、上述の通り、医療現場における治療方針以外の側面についての実証的研究は乏しい。ここから米国の高齢者を対象とした国際比較調査を実施することで、日本の高齢者のエンド・オブ・ライフへの態度の実態をより明らかにすることができると考えた。

加えて、エンディングノートや終活セミナーなど、高齢者のエンド・オブ・ライフをめぐる取り組みが各地で開催されているが、高齢者の高い関心にもかかわらず、実際に実践する人は多くない現状がある。またこれらのツールは学問的知見に裏付けされたものではない。さらに介護や終末医療、葬儀の希望が叶えられるかどうかというエンド・オブ・ライフをめぐる問題は、遺される家族とのコミュニケーションの問題と直結するが、これまでのほとんどのツールでは高齢者自身の希望を表明することにとどまっていた。これらの問題を克服した新しいコミュニケーションツールを作成することが必要である。

2. 研究の目的

上記の問題意識のもと、本研究では、地域高齢者のエンド・オブ・ライフへの態度の実態および社会文化的文脈との関係性を、国際比較調査を通じて把握した上で、そのケアに資する実践的ツールを開発することを目的とした。

3. 研究の方法

まず日本の地域在住高齢者のエンド・オブ・ライフ活動についての実態と関連要因を探索するためパイロット調査を実施した。具体的には西日本に居住する地域高齢者を対象とした質問紙調査を実施した。西日本で開催された終活セミナーを通じて 271 部の質問紙を配布し、177 名から回答を得た。不誠実回答や欠損の多かったものを除き、最終的に 123 名のデータを分析に使用した。質問紙には独自に作成した、遺言や葬儀、終末医療などに関する行為(エンド・オブ・ライフ活動)の有無を尋ねる質問項目に加えて、死生観、メンタルヘルス、デモグラフィック変数が含まれていた。

パイロット調査の結果を踏まえて、東海圏内に居住する地域高齢者を対象とした質問紙調査を実施した。シルバー人材センターを通じて調査協力者を募集し、167 名の回答を得た。不誠実回答を除く 156 名のデータを分析に用いた。質問紙には、先行研究をもとにエンド・オブ・ライフへの態度(治療方針や葬儀の希望、次世代に残したい人生経験などについて文章に残しているか(AD)、身近な人と話し合っているのか(ACP))の質問項目を準備し、盛り込んだ。また死への態度、メンタルヘルス、ソーシャルサポート、ゆだねたさ、対人関係、デモグラフィック変数など多数の項目も含まれていた。

さらに米国イリノイ州に居住する地域高齢者を対象とした質問紙調査を実施した。スノーボーリング法を用いて地域在住の高齢者に対する質問紙調査への協力を依頼し、97 名からの回答を得た。65 歳未満の対象者を除いた 82 名のデータを用いて分析した。なお質問紙にはエンド・オブ・ライフへの態度を含むオリジナル項目を英訳し、内容の等価性を確認した上で、死への態度、メンタルヘルス、ソーシャルサポート、対人関係、デモグラフィック変数など、国内調査と同様の項目を用いた。

最後に、ライフエンディング・ワークを作成した。まず既存のエンディングノートについての内容分析を行った。また Advanced Directives の実施困難性と ACP の重要性といった近年の動向、ライフレビューとディグニティ・セラピーの構成要素、これまでの調査結果、さらには既存のゲーミング・ツールを吟味した上で、ナラティブ死生学(川島, 2011)の観点に基づき、ワーク案を作成した。試作したワークを、心理学を学ぶ大学生や高齢者のグループを対象として実施し、そこでの感想や意見をもとにコンテンツやルールの修正等を行い、独自のライフエンディング・ワークを作成した。

なお本研究は、中京大学倫理審査委員会ならびに米国ノースイースタンイリノイ大学倫理審査委員会の承認を受けた。

4. 研究成果

(1) 研究の主な成果

エンド・オブ・ライフ活動についての探索的検討

本研究の結果、エンド・オブ・ライフ活動の項目から3つの合成変数、すなわち「計画」(自分が入るお墓を決めていますか、など)、「選好」(自分のやりたい葬儀のかたちはありますか、など)、「準備」(遺言を書いていますか、など)を作成した。また他の変数との関連を検討したところ、エンド・オブ・ライフの活動は終活セミナーの受講や肉親との死別経験によって高まること、また死への恐怖が高いほど終末医療に関する希望を家族に伝えたり、葬儀の内容について話し合う程度が低い傾向がうかがえた。

なお本研究は国際学術誌 Omega: Journal of Death and Dying に掲載され、高い評価を得た。

エンド・オブ・ライフへの態度尺度の開発と関連要因の検討

エンド・オブ・ライフへの態度項目について AD・ACP それぞれについて因子分析(重み付き最小2乗法、プロマックス回転)を実施したところ、AD については「死後の手続と儀礼およびケアの希望」と「人生の意味」の二因子構造が、また ACP については「死後の手続と儀礼」「人生の意味」「ケアの希望」からなる三因子構造が得られた。因子構造と内的一貫性が確認されたため尺度得点を用いて、他の変数との関連を検討した結果、死を積極的に受容することや対人関係の問題、書字習慣などとの関連が確認された。

なお本研究は日本発達心理学会第30回大会で発表し、現在、投稿論文を鋭意執筆中である。

高齢者のゆだねたさ尺度の開発

終末期の意思決定における不決断や他者への負託について検討するため、老年期における意思決定の場面においてその困難さや諦めなどから他者に決定を負託させようとする態度を測定しうる、ゆだねたさ尺度を開発した。因子分析(最尤法・プロマックス回転)の結果、一因子構造が確認され、十分な信頼性が確認された。また先延ばし傾向、高次生活動作(ADL) 対人関係との間に相関関係が認められた。

なお本研究は日本発達心理学会第30回大会で発表し、現在、投稿論文を鋭意執筆中である。

米国高齢者のエンド・オブ・ライフへの態度の検討と国際比較

得られたデータを分析した結果、日本人高齢者への調査を通じて開発したエンド・オブ・ライフへの態度尺度と同様の因子構造と高い内的一貫性が確認された。また日米間での比較を行ったところ、終活ブームが流行する日本よりも米国の高齢者の方が、積極的にエンド・オブ・ライフに取り組んでいた。また日本人高齢者とは異なり死を受け入れる態度とは関連が認められなかった。今後、精緻な分析を行なっていく予定である。

ライフエンディング・ワークの開発

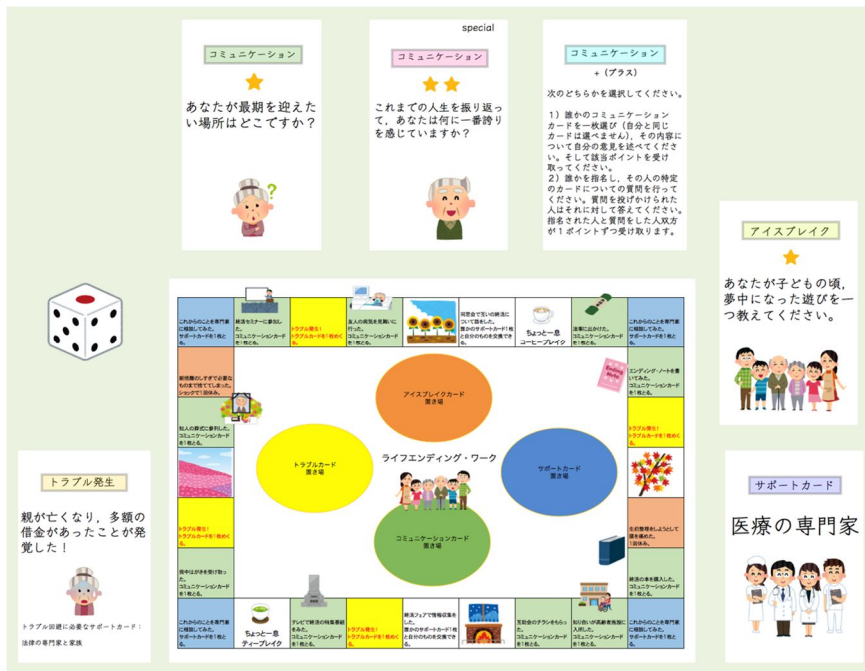
エンディングノートや終活に関する冊子・書籍を収集し、分析した結果、自身の人生の振り返りや家族の歴史、葬儀や延命治療などについての希望、財産の記録や具体的手続きに必要な情報、遺される人へのメッセージに大きく区別された。その上でゲーミングを通じて高齢者の対人コミュニケーションを促し、そこで醸成された所属感や有能感をもとに自らのエンド・オブ・ライフに積極的に向き合っていくことを促しうる、実践的ワークが開発された。

ワークの特徴としては、エンド・オブ・ライフに関わる特定の事柄(例えば、延命治療の希望や希望する葬儀の形など)について高齢者が自身の考えを語り、それを周囲の他者が受容的に受け止めること、また人生統合への働きかけにより、死への向きあいとジェネラティビティを促進するための工夫や、ゲーム性を高めるための工夫(例えば、すごろくをベースとして目標ポイントに早く達したものが勝ち、トラブルマスを設定する、明確なルールの設定、全員が意見を述べるカードやサポートカードといった特殊要素も盛り込むなど)が挙げられる。

なお本研究は日本発達心理学会第30回大会で発表し、現在、公開準備中である。

ワークの概要
1. コミュニケーション版： <ul style="list-style-type: none">• コミュニケーションカード(通常、スペシャル、プラス)のみを使用• 点数はつけず、各自のエンド・オブ・ライフについての考えや態度についてコミュニケーションを図る
2. すごろく版： <ul style="list-style-type: none">• 全ての道具を使用• 点数を競い合う形のゲーム形式で行う

カードの種類
1. コミュニケーションカード： エンド・オブ・ライフに関わる様々なトピックス(医療、介護、葬送、財産等)
2. コミュニケーションカード・スペシャル： 参加者が自身の人生を受容し、尊厳(dignity)を感じ、次の世代への関心(generativity)を高めるトピックス
3. コミュニケーションカード・プラス： コミュニケーションの活性化を企図し、他者への質問や自分の意見の表明ができる
4. このほか、トラブルカード、アイスブレイクカード、サポートカードなどがある



(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究を通じて、日米の地域高齢者のエンド・オブ・ライフへの態度構造とニーズの実態が明らかとなった。研究蓄積が乏しい地域高齢者のエンド・オブ・ライフへの実態と関連要因を検討することで、当該研究領域の進展に貢献することができた。特に医療現場で積極的に検討されてきた治療方針のみならず、葬儀などの儀式や経済的な側面も加えた総合的な検討を行っている点は、当該研究領域に大きなインパクトをもたらすものである。加えて、生成継承性(ジェネラティビティ)に着目して尺度構成に取り入れた「人生の意味」はこれまでの実証研究では十分掘り得ていなかった側面であり、エンド・オブ・ライフケアの研究・実践に大きなインパクトを与えるものである。

また高齢者のエンド・オブ・ライフケアを促す実践的ツールを開発した。エンディングノートや治療方針に焦点化したコミュニケーションツールはこれまでも開発されていたが、上記実証的知見に基づき治療方針、葬儀などの儀式、経済的な側面について盛り込んでいる点、生成継承性(ジェネラティビティ)の賦活化を重視した仕掛けを盛り込んでいる点、「すごろく」という足場を設けることで自然と参加者がエンド・オブ・ライフに関する認識や感情を話すことができる点などに、本研究のオリジナリティがある。

(3) 今後の展望

今後、得られたデータの精緻な分析を進め、論文や書籍にまとめて社会発信していく。また開発したライフエンディング・ワークについては実際のエンド・オブ・ライフ行動にどのように結びつくのかや、ワーク使用に際しての留意事項や使用者の範囲(利用可能な人と利用が難しい人の区別)についてさらに検討していくことで、より使い勝手の良いものにしていく。

<引用文献>

川島大輔 (2011). 生涯発達における死の意味づけと宗教 ナラティブ死生学に向けて ナカニシヤ出版

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Tanaka Miho, Takahashi Masami, Kawashima Daisuke	4. 巻 online first
2. 論文標題 End-of-Life Activities Among Community-Dwelling Older Adults in Japan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 OMEGA - Journal of Death and Dying	6. 最初と最後の頁 online first
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1177/0030222819854926	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 川島大輔	4. 巻 18
2. 論文標題 日本語版 Revised Death Anxiety Scaleの作成	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中京大学心理学研究科・心理学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 川島大輔	4. 巻 10
2. 論文標題 「死別における意味」の意味 意味再構成理論の観点と今後の展望	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 質的心理学フォーラム	6. 最初と最後の頁 16-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.24525/shitsuforum.10.0_16	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 川島大輔	4. 巻 16
2. 論文標題 死を語り合うこと - ナラティブ・アプローチからの試論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要	6. 最初と最後の頁 16-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) http://doi.org/10.15027/45501	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Basurto, K.S., Arroyo, E., & Takahashi, M.
2. 発表標題 Death Attitude among Young and Old: Religiosity and Financial Status as its Correlates
3. 学会等名 11th Biennial Meeting of Society for the Study of Human Development (SSHD) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 辻本耐・川島大輔・田中美帆
2. 発表標題 高齢者のEOLケアへのアクションリサーチ(1) - 地域高齢者のエンド・オブ・ライフへの態度およびその関連要因 -
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会(早稲田大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川島大輔・古賀佳樹・葉室亮介
2. 発表標題 高齢者のEOLケアへのアクションリサーチ(2) - ライフエンディング・ワークの開発 -
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会(早稲田大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中美帆・川島大輔・辻本耐
2. 発表標題 老年期におけるゆだねたさ尺度の開発
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会(早稲田大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 A. Chow, M. E. Macdonald, L. Breen, S. Cadell, D. Roth, K. Joy, D. Kawashima
2. 発表標題 Report from workgroup: Public Health workgroup
3. 学会等名 The 30th meeting of the International Work Group on Death, Dying and Bereavement (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川島大輔
2. 発表標題 死別における意味の意味
3. 学会等名 日本質的心理学会第15回大会(名桜大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川島大輔
2. 発表標題 高齢期における死と宗教
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会シンポジウム「宗教心理学的研究の展開(14) 超高齢社会における宗教性/スピリチュアリティ」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川島大輔・田中美帆・Takahashi, M.
2. 発表標題 高齢者の終活と関連要因についての探索的検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第28回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川島大輔
2. 発表標題 老年期のエンド・オブ・ライフへの希望と実際 他者への期待と負担感との狭間で
3. 学会等名 日本発達心理学会第28回大会シンポジウム
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 川島大輔	4. 発行年 2016年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 175-188頁(294頁)
3. 書名 「老年期における死」『はじめての死生心理学 現代社会において、死とともに生きる』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>死の心理学研究(川島大輔研究室) https://psychology-of-death.jimdo.com</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	葉室 亮介 (Hamuro Ryosuke)	一般社団法人ライフエンディング・ステージ・理事	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	マサミ タカハシ (Masami Takahashi)	ノースイースタンイリノイ大学・Department of Psychology・professor	
研究協力者	田中 美帆 (Tanaka Miho)	武庫川女子大学・文学部心理・社会福祉学科・助教	
研究協力者	辻本 耐 (Tujimoto Tai)	学校法人長栄学園・心理発達相談員	